夜叉神の一つ目小僧

現代に残る「コト八日」

沓沢集落

この一つ目小僧は、小正月に行われるどんど焼きにも関係しています。沓沢の言い伝えによれば、12月末に悪神がやってきて、病気にする人を帳面に付けます。その帳面を悪神は正月の間、道祖神に預けますが、村人を守る道祖神はそれをどんど焼きで燃やしてしまい、村人の1年間の健康を保証するのです。別の地域では一つ目小僧を悪神とする例が多く、沓沢でも「一つ目小僧＝悪神」であったとも考えられます。

誰もが知っている一つ目小僧。実は南アルプス市にも12月と2月に現れることをご存知ですか。芦安地区には山々に近い沓沢集落に、こんな昔話が伝えられています。

木こりの太郎助は、村の衆と山小屋に泊り込んで山仕事をしていました。12月のお松節句（注1）の頃（13日）になると、仲間は正月準備のため村へ帰ることにします。しかし働き者の太郎助は、もっと稼ごうと1人残ることにしました。村の衆がいなくなった山の中は、うって変わって静かになり、夕闇が深くなるにつれ、太郎助は心細くなりました。仕事もそこそこに山小屋にひきあげてきたところに「オーイ」と呼ぶ声。誰かと思い外に出てみると、そこに立っていたのは満月のような目がひとつ、口は耳もとまで裂けた一つ目小僧でした。恐ろしくて震え出した太郎助は、勇気を振りしぼり、燃えさしを怪物の目玉めがけて投げつけます。すぐに鍵をかけ、布団にもぐりこんで、怖さに震えながら一夜を明かすと、一目散に村へ逃げ帰りました。その後、あまりの怖さから太郎助は亡くなってしまいました。村の人々は欲張りの太郎助を一つ目小僧がこらしめたのだと言ったそうです。

太郎助を「欲張り」と決めつけるのはなんだかあわれな感じもします。「働き者」であった太郎助はなぜ一つ目小僧のために死んでしまうことになったのでしょうか。

日本各地で一つ目小僧が現れる日は12月8日と2月8日前後に集中します。沓沢でも2月3日の節分の日に一つ目小僧が現れると信じられ、今でもバリバリの木の枝に鰯（いわし）を刺したものを魔よけとして玄関に飾ります。この信仰は「コト八日」（注2）と呼ばれる民間信仰で、古くから日本各地で行われていました。各地でさまざまな言い伝えがあるためひとくくりにはできませんが、この日は、神様が移動する日とも考えられ、それゆえ人は神の姿を見ないよう家にこもり、物忌（ものい）みする（注3）地域も多いのです。

12月13日に山仕事をせず、正月支度をする沓沢の風習は「コト八日」の慣習の一つであったのでしょう。太郎助が一つ目小僧と出会ってしまったのは、12月13日には山仕事をしないという古い約束事を破ったからなのです。沓沢の昔話はかつて人々が信仰してきた山の伝統を今に伝えています。

沓沢のドンド焼き
かつては「今年は病ませられる人はいない」と唱えて村人の名簿を火の中に入れていました。

玄関に飾られたバリバリの木の枝と鰯
他の地域では、目の多さに驚いて一つ目小僧が退散するように玄関にカゴを吊す地区もあります。

（注1）12月13日はお松節句と言って、山仕事を切り上げて家に帰り、正月の準備をする日でした。
（注2）コトは本来「祭事」を意味します。12月8日をコト始め、2月8日をコト終わりといいますが、逆に言う地域もあります。
（注3）夢見の悪いときや、けがれに触れたとき、また、暦の凶日などに、家にこもるなどして身を慎むこと。